リディア・エリザベト・デル・リット夫人遺贈
『フランス古書簡「マルク・ポスタル」コレクション』について
Collection des *Correspondances Anciennes* et *Marques Postales*, Don de Mme Lydia Elisabeth DEL LITTO

京都大学名誉教授　鈴　木　昭一郎

19世紀に切手が実用化されるまで、ヨーロッパで、手紙はどのようにして送られていたか。17世紀末までは郵便制度そのものが存在しなかった。民間で遠く信書を送るには、たまたま知人が旅にでるという「幸便」に託すか個人的に「飛脚」を立てる他はなかった。したがってその時代の手紙には、一般に発信地や受信地の痕跡が残されていない。

18世紀になると駅馬車の発達が初期の郵便制度を生みだすことになった。封筒はまだ用いられず、手紙は裏返して折りたたみ、それを三つ折りにして左右または上下の端を互いに差しこんで封蠟でとじ、反対面に宛名を記して駅馬車の宿駅（ポスト）へ持参すると、宿駅の長が宛名の面に手書きでマークを入れた、それがマルク・ポスタル（Marque postale）つまり宿駅のマークである。料金は原則として受取人払い、公文言は前払いで、その場合は手書きでP. P. (port payé料金支払済)と記入された。やがてこれらのマークにはスタンプが併用され、発信地・中継地・受信地の市町村名が県番号とともに印字され、ポストという語も「宿駅」から現在の郵便局・郵便制度に近いものをさすことになる。

世に切手の蒐集家は多いが、このマルク・ポスタルも好事家の垂涎の的である。郵便切手はそれだけの存在だが、マルク・ポスタルは、それが記入された手紙と不可分であり、手紙の歴史的・社会的・文化的な価値が加わる。また最近の「肉筆もの」への嗜好がますます高値をよんでいる。ところでこの『フランス古書簡「マルク・ポスタル」コレクション』（2300通＋枝番）が京都大学附属図書館に寄贈された。寄贈者はグルノーブル大学名誉文学部長・名誉教授ヴィクトール・デル・リット氏夫人、故リディア・エリザベト・デル・リット女史である。デル・リット氏は私の恩師、スタンダール研究の権威であり、1984年にはフランス政府文化使節として来日され、京都大学文学部でも講演された。ご夫妻にはお子様がなく、コレクションの散逸をおそれて私に下さると申しでておられたのを、私が京都大学への寄贈を条件にお預かりしていたのである。あまりにも高価で、また稀有の文化財であり、ご夫妻のご好意は頂くとしても、私が死蔵することは躊躇された。

Mme L. E. Del Litto

贈呈式は1998年10月22日、総長長尾真先生と附属図書館長菊池光造先生が署名されたデル・リット氏あての見事な装幀の感謝状を、菊池先生から図書館長室で、大学院文学研究科教授吉田城氏と図書館事務局の多くの方々の列席のもとに、デル・リット氏の代理の私にお手渡しいただくという形で行われた。感謝状にはこの「コレクションがマルク・ポスタルとしての大きな価値はもとより、その時代のフランス社会と文化を研究する上で極めて貴重な学術資料であり、本学へのご寄贈を心から喜ぶ」旨が明記され、デル・リット氏からは、総長と図書館長の双方に10月31日付で、パリ市立歴史図書館からの記念品とともに受領書が発送された。私が1987年８月15日、まだご存命であったデル・リ

ット夫人と契約書をかわし、コレクションを京都に持ち帰り、電算化の項目を策定し、その項目と記入箇所を表紙に、宛て先とマルク・ポスタル面を裏表紙に複写したシートに手紙を１通ずつ収め、シートに通し番号をつける作業を始めてから、すでに11年が経っていた。

吉田城教授　　著者　菊池光造館長

南フランス、アルデッシュ県、ローヌ河の右岸にトゥルノンという町がある。現行の道路地図でパリから550㎞、リヨンから88㎞、グルノーブルから98㎞、マルセイユから237km、現在では対岸のタンと併せてタン・トゥルノン（Tain-Tournon）とよばれる人口15,000人の地方都市。18世紀に、ここにボテュ家 Les Botu という法曹家の一家があった。デル・リット夫人のコレクションは、この一族の間の私信、この家族あての手紙、あるいはこの一家に保存されていた民事・商事関係の書簡が主体である。時代的には、主としてフランス革命からナポレオンの第一帝政・王政復古のころで、当主エミール・ボテュが、彼あての手紙に言かれた肩書 Procureur du Roi（アンシアン・レジーム下の地方裁判所首席検事）、Vérificateur des domaines du Roi（王室土地財産検査官）、Procureur impérial（帝政下の検事）、Juge auditeur（傍聴裁判官）、Juge d'instruction（予審判事）、Maire（市長）などの要職を歴任した時代であり、また地理的には、古代から地中海と北海をむすぶ要路であったローヌ河とソーヌ川を縦軸に、南はプロヴァンスから北はシャンパーニュ地方、横軸は南に広く北に狭く、南では東のイタリア・ピエモンテ地方から西のボルドーまで、逆丁字形に広がる当時の南仏の地域経済・文化圏を示している。

電算化の項目は、それぞれの書簡について、A.登録番号、B.箱番号、C.発信年月日、D.紙形、E.紙質、F.体裁、G.保存状態、H.発信地、I.中継地、J.受信地、K.マルク・ポスタルの同定、L.発信人氏名、M.受取人氏名、N.手紙の内容であり、その読みとりが進められている。現在までに解読した手紙のうち、もっとも古いものは1668年４月27日の日付をもち、最も新しいものは19世紀末、初期の通常切手を貼ったものである。すなわちこのコレクションは、ブルボン王朝の初期から第三共和制初期にいたる南フランスの歴史的・経済的・政治的・風俗的・文化的諸相を「小さな具体的事実」で伝える第一級の一次資料であり、その学術的価値ははかり知れない。したがって上記の項目のうち、マルク・ポスタルとしての市場価値にかかわるD.E.F.G.Kには今回は手をつけていない。店頭価格で時価数億円になるはずだが、見積り可能な業者はロンドンに一社しかなく、また見積りということ自体、散逸をおそれたデル・リット夫人の遺志にそう所以ではなかった。

解読作業は1999年夏に始まり、現在、総合目録作成の第一段階として、全資料の基本データ（発信人・発信地・受取人・年月日等）の解読・記録を終ろうとしている。2000年度以降はこれらの情報をもとにデータベースの作成を開始し、このデータベースを基礎に総合目録を作成したい。家系図、書簡内容の記述、一部書簡の電子ライブラリー公開をめざした転写・翻訳にも着手したところである。地域研究・歴史研究の一般資料としての活用には、このような地道な作業が不可欠だからである。書簡内容の公表にはプライヴァシーの問題が残るが、総合目録の刊行は、すでにデル・リット氏のご了承をえている。

登録番号　98084840

このデータベースの利用は今後、多方面に指向されよう。地域研究が重視される現在、『デル・リット・コレクションに基づく南仏文化経済圏の歴史的研究』(仮題）とも言うべき重要な研究のコーパスとなる。この資料は、200年間にわたる時の流れのなかで、南仏の歴史的・経済的・政治的・風俗的・文化的諸相に多様なアプローチを可能にする。歴史的には未知の多くの事実を提供し、経済的には特に18世紀における経済成長・物価の変遷、政治的には大革命期以降の連邦・地方分権主義と中央集権主義の対立、風俗的文化的には、文化人類学・「民俗学」的分析を可能にし、さらには地域コミュニケーション論、フランス語地域語史・語彙・語法論・書簡文体論にも展望をあたえるであろう。

資料の解読・総合目録の作成と電算化に着手するには、多くの参考文献と機器、高度で緻密なマンパワーが必要であった。予算措置の実現のため多大のご配慮をいただいた関係各位、解読に協力された奈良女子大学大学院文学研究科博士課程井岡てるみ、京都大学大学院文学研究科博士課程辻川慶子・駒田登紀子・折井穂積・山田礼雄の諸氏に感謝し、またすでに現役を退いた私と附属図書館との仲介の労をとられ、数々の貴重な助言を惜しまれなかった吉田城氏に改めて深謝し、併せて今後のお力添えをお願い申し上げたい。

（すずき　しょういちろう）

附属図書館百周年

「『静脩』総目次」を読む④

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛長　松　田　　博

展示会に目をやると、第1回が1900(明治33)年12月10日～11日に「附属図書館創立1周年記念展覧会」のテーマで開催されている。『静脩』には創刊の年1964年9月に開催された「ルーマニア図書展」以降の展示会記事が収録、紹介がなされている。一方、これとは別に部局毎、たとえば法科大学における1916(大正5)年2月13日の「マルサス生誕150年記念会展示」をはじめ、文学部、経済学部等で開催された展示会の内容が紀要等に収録、紹介がなされている。いずれにしても、これらをみていると、「テーマ」自体の重複も少なく、当時の担当者の工夫や努力、個性や創造性がひしひしと感じられるのである。附属図書館100年のこれまでの開催回数は、掌握できるところで120回、『静脩』刊行後でも64回を数える。「貴重書展」、「維新展」をはじめ順を追って振り返ってみると、これまでのもので企画等規模が最大のものは1997年10月開催の「京都大学創立百周年記念展覧会　知的生産の伝統と未来」であり、また展示回数等異色なものは、「貴重書展」にたびたび登場し、それ自体の展示会でも1957年10月および1963年6月の2度にわたり開催されている「谷村文庫展」であるように思う。それだけにこの谷村文庫にまつわりそうな話題には興味がそそられる。そのひとつは谷村の収書姿勢についてであり、ふたつには藤本ビルブローカーと『国富論』をめぐることについてである。